

世界を神にと
～山室軍平の祈りと救世軍

奨励	立石 真崇【たていし・まさたか】
奨励者紹介	救世軍神戸小隊牧師

さて、あなたがたは、キリストと共に復活させられたのですから、上にあるものを求めなさい。そこでは、キリストが神の右の座に着いておられます。上にあるものに心を留め、地上のものに心を引かれないうにしないで。あなたがたは死んだのであって、あなたがたの命は、キリストと共に神の内に隠されているのです。あなたがたの命であるキリストが現れるとき、あなたがたも、キリストと共に栄光に包まれて現れるでしょう。

だから、地上的なもの、すなわち、みだらな行い、不潔な行い、情欲、悪い欲望、および貪欲を捨て去りなさい。貪欲は偶像礼拝にほかならない。これらのことのゆえに、神の怒りは不従順な者たちに下ります。あなたがたも、以前このようなことの中にいたときには、それに従って歩んでいました。今は、そのすべてを、すなわち、怒り、憤り、悪意、そしり、口から出る恥ずべき言葉を捨てなさい。互いもうそをついてはなりません。古い人をその行いと共に脱ぎ捨て、造り主の姿に倣う新しい人を身に付け、日々新たにされて、真の知識に達するのです。そこには、もはや、ギリシア人とユダヤ人、割礼を受けた者と受けていない者、未開人、スキタイ人、奴隷、自由な身分の者の区別はありません。キリストがすべてであり、すべてのもののうちにおられるのです。

あなたがたは神に選ばれ、聖なる者とされ、愛されているのですから、憐れみの心、慈愛、謙遜、柔和、寛容を身に着けなさい。互いに忍び合い、責めるべきことがあっても、赦し合いなさい。主があなたがたを赦してくださったように、あなたがたも同じようにしないで。これらすべてに加えて、愛を身に着けなさい。愛は、すべてを完成させるきずなです。また、キリストの平和があなたがたの心を支配するようになさい。この平和にあずからせるために、あなたがたは招かれて一つの体とされたのです。いつも感謝していなさい。キリストの言葉があなたがたの内に豊かに宿るようになさい。知恵を尽くして互いに教え、諭し合い、詩編と賛歌と霊的な歌により、感謝して心から神をほめたたえなさい。そして、何を話すにせよ、行うにせよ、すべてを主イエスの名によって行い、イエスによって、父である神に感謝しなさい。

(コロサイの信徒への手紙 3章1―17節)

救世軍 The Salvation Army

今日、この祈りの場に私たちを集わせてくださった神に感謝し、主にある挨拶をお送りします。私は、「救世軍（きゅうせいぐん）」という教会のグループから来ました。救世軍〔The Salvation Army（ザ・サルベーション・アーミー）〕は、今から約150年前（1865年）、イギリスのロンドンで誕生しました。メソジスト派教会の牧師であったウィリアム・ブース（1829～1912）が、当時の社会の底辺とみなされていたロンドン東部において苦しむ人々のために伝道し、助けの手を差し伸べたことから始まりました。現在では世界128カ国で働きが進められています。救世軍は、「心は神に、手は人に」というモットーをもち、信仰と実践（奉仕）の両方を大切にしています。そして、お互いがよりよく力を合わせて活動することができるようにという目的で、軍隊の組織を教会の組織や活動の仕組みに採り入れています。

日本においては、1895（明治28）年、イギリスから派遣された一団によって働きが始められました。ちなみに、京都においては、下京区に小隊（教会）があり、先日110周年を記念しました。年末には河原町の百貨店（高島屋）の前で「社会鍋」という助け合いの運動を行っています。すでにご存知の方もおりかもしれませんが、まだ見たことがないという方は心に留めていただければうれしく思います。

山室と同志社

さて、この救世軍に入隊し、日本人で最初の士官（牧師、伝道者）となったのが、山室軍平（1872～1940）です。彼は日本における救世軍の基礎を築いたという点で私たちの教会にとって大切な存在であることはもちろんですが、明治から昭和初期の社会福祉事業の一端を担ったキリスト者としてもその意義は覚えられています。山室と同志社のかかわりを表すものとして、クラーク記念館2階ホールの壁に、山室のレリーフが飾られています。また昨年、山室軍平の生涯を描いた映画が製作され、この秋に「地の塩 山室軍平」という題で公開されます。ご参考になればと思います。

山室は明治5年、岡山県阿哲郡本郷村（現在の新見市）に生まれました。10代で身を立てたいと上京し、働きながら学んでいた時にキリスト教の伝道に出会いました。今まで考えたことなかった精神の世界があることに心を動かされ、イエス・キリストを信じました。当時のキリスト教については、知識者層への働きかけが主流であったと言われていますが、キリスト者となった山室の心は、自分とどのような一般の人々（平民）に向かいました。そして、「どんな無学な人でも、聞いて解るように福音を伝え、またどんな無知な人でも、読んで解るように真理を書きしるす者とならせたまえ」という祈りをささげ、「『神と平民のため』に尽くす者」となることを志しました（『私の青年時代』より）。

その後、教会活動をおとして、新島襄が人格者であるという話を聞いて憧れを抱き、17歳のときに同志社（神学校）に入学しました。生活が苦しく、信仰上の悩みも経験したことから、卒業せずに同志社を去りましたが、同志社で学んだこと、経験したこと、生涯変わらぬ友を得たことなどは、その後の生涯の大きな土台となりました。たとえば、同志社入学に前後して、山室は石井十次と出会います。石井は岡山孤児院の創設者で、彼自身もキリスト教社会福祉家として知られていますが、実は彼の方が先に救世軍について関心を寄せていました。山室は、石井をおとして救世軍を知り、また、石井の紹介で救世軍を訪ねることになりました。

山室と救世軍

山室が救世軍を訪ねたのは、同志社を去ってからしばらく経った23歳のときです。山室は、彼らが聖書を知識や思想としてとらえるのではなく、実生活に活かすことを重んじていることに感銘を受けました。自分が求めていた「命の捨て所」はここであると確信し、救世軍に加わりました。68年の生涯を終えるまで救世軍の一員として、伝道と奉仕を続けました。その姿から、後に「救世軍の山室か、山室の救世軍か」と述べた人もいます。山室に特徴的なのは、彼自身の信仰の歩み、あるいは平民（一般民衆）のために奉仕したいとの使命など、いわばキリスト者としてのアイデンティティが、救世軍という教会の一員としてのアイデンティティと深く結びついたということです。

この春学期のチャペル・アワーについて、新約聖書ローマの信徒への手紙10章8節に基づき、「御言葉はあなたの近くにあり、あなたの口、あなたの心にある」という統一テーマが掲げられていることを事前にかがいました。そして、「チャペル・アワー案内」の中には、「神の『御言葉』、『律法』、『信仰』との出会いが実は私たちの日々の経験や生活と深く結びつくものであり、それが私たちの人生や生き方に深く繋がっていることを告げるメッセージとして受けとめたい」という越川弘英先生の勧めが含まれていました。このテーマをふまえるならば、山室も確かにその時代において、聖書の御言葉と自分の生活・人生が結びつく経験をした一人であり、同じような「御言葉」との出会いを人々に届けようとしていました。そして、そのような出来事が起こる場所が教会に、とくに彼にとっては救世軍にあったのです。

この点について、山室が救世軍とのかかわりの中で信仰のあり方について述べる、次のような文章があります。

「救世軍の宗教は『失せたるを尋ねて救ふ』救霊の宗教である。『貧しきを福音を聞かせらるる』民衆の宗教である。『道や籬（まがき）の邊（へん）に往き、人々を強ひて連れ来る』進撃の宗教である。『飢ゑし時に食はせ、をきし時に飲ませ、旅人なりし時に宿らせ、裸なりし時に衣せ、病みし時に訪（とふら）ひ、獄（ひとや）に在りし時に事（つか）ふる』實行の宗教である。又『ユダヤ人（びと）もギリシャ人（びと）もなく、奴隷も自主もなく、男も女もなく、基督耶穌（キリストイエス）にありて一體（たい）たる』萬民同胞主義の宗教である」（『私の青年時代』より）。

ここでは聖書を複数引用しながら、それらに対応するようにして救世軍の働きが述べられています。聖書の御言葉は今日においても生きて働く力のあるものであり、救世軍は自らもその御言葉の力によって動くと共に、その力を世に体现していくものであるという、山室の理解がよく表れていると思います。

さて、文章のしめくりに、「萬民同胞主義（internationalism）」という言葉が登場しましたが、これは山室独自の考えではなく、救世軍が初期の頃から取ってきた立場でもあります。この言葉を糸口にして、なお山室の信仰と生涯について振り返りたいと思います。

山室にとって《世界の窓》となった救世軍

一般に19世紀は、欧米のキリスト教会が海外宣教、とくにアジアへの伝道を盛んに進めた時期で、プロテスタントの宣教団体も多く誕生したと指摘されています。ただし、救世軍については、国外の宣教や奉仕を掲げて始まったわけではありませんでした。創立者ブースにとっての関心は、あくまでも目の前にいるロンドンの底辺の人々にありました。しかし、隣人愛を実践するうえでは伝統に固執しない、既存の教会のスタイルにとらわれないという姿勢に共感が広がり、救世軍が日本に来る直前には、当時すでに三十四、五の国や地域で活動していました。

その際、救世軍が大切にしていた点は、現地への適応（adaptation）ということでした。これは西洋の文化や生活スタイルをそのまま押し付けるのではなく、現地の暮らしに自分たちを合わせて、共に生きるところから働きを進めようというものでした。古い記録には、海外から来た救世軍士官（伝道者）が和服を着ている写真があり、また、日本家屋に住み、積極的に日本語を学び、和食を食べたということも伝えられています。山室は、一方では彼らの努力を認めますが、それだけでは解消できない隔たりを覚え、さらには活動上の問題を抱えることもありました。

救世軍に入隊した3年後の所信として、山室は次のように記しています。

「必要なのは救世軍の主義、精神に日本服を着せることである、その進撃的の運動を日本流に同化することである。日本人によって戦われ、日本人によって支えられ、日本人を救うに適する日本流儀の救世軍を産み出すこと」（『閑聲』1898年7月15日号）。

「日本流儀の救世軍」という表現は、救世軍の本部が置かれている西洋にただ従属するのではない、あるいは対立するのではない、世界とのつながりを保ちながら、他の国の人々では代わることのできない自分たちの使命を担おうという自覚の表れだと言えます。実際、山室は生涯、イギリスおよびヨーロッパ各国、アメリカに13回、旅行しました。当時からすれば多い渡航回数だと思います。ただしこれらは、神学の研究や留学のためではなく、各国の救世軍の社会事業活動の視察、イギリスの万国本営（本部）との交渉等を目的とするものでした。日本でよりよくキリストを伝え、神の愛を実践していくために海外から実地に学び、海外との対話を重ねたことにより、イギリスの万国本営の側も山室に信頼を寄せ、日本における救世軍の働きは進展していきました。

私は以前、イギリスのノッティンガムにある救世軍の資料センターから、山室の直筆のメモがあるとメールをもらったことがあります。そのメモには、ヨハネによる福音書12章24節「はつきり言っておく。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ」にあたる、古い日本語訳が1909（明治42）年の日付と共に記されていました。このメモに先立って、山室はロンドンで創立者ブースと面会しており、「日本流儀の救世軍」を訴えたことを記録からたどることができます。日本から離れた地において記した「一粒の麦」には、世界の中の一人であるという自覚、一人の日本人であるという自覚、キリスト者としての自覚、救世軍という教会の一員であるという自覚がそれぞれに重なり合っているように感じられました。

自分、社会、世界、そのなかに立つキリストの教会

これまで山室の信仰や生涯を紹介しましたが、これらをとおして皆さんと分かち合いたいことは、聖書の御言葉との出会い、イエス・キリストとの出会いは、自分の内面や自分の生き方だけを取り扱って終わるものではないということです。確かに宗教や信仰といったときには、自分の心、あり方、生き方を考えることは大切です。しかし、信仰者となったからこそ見えてくるものがあり、新しいまなざしをもって社会や世界を見つめていく。そして、社会や世界の中に生きる一人として自分を新しく受け取っていく。そのような地平の広がりを聖書は私たちの前に開いてくれるのです。

今日、新約聖書コロサイの信徒への手紙3章1節から17節を開きました。冒頭は、「あなたがたは、キリストと共に復活させられたのですから、上にあるものを求めなさい」と勧めの言葉から始まります（1節）。イエス・キリストを受け入れた者は、キリストと結び合わされて生きる者なのだ。それだから、「上にあるものを求めて」生きていこうと呼びかけるのです。そして、命をどのように使うのか、命の方向とも言えることが二つ提示されています。

一つは、5節から9節前半において、自分の命は自分の内にあるのであって、自分が命を使い、自分を作り上げ、世界を広げていこうとする方向です。それは内から外へと発展し、広がっていくように見えますが、自分の欲求によって自己を拡大していくことになり、「貪欲」が自分の主人になると指摘されています（5節）。自分の世界が広がっていくようで、かえって自分にはあれが足りない、これが欲しいと、自分に固着していく。そして貪欲によって肥大した「自分」同士は悪意を向け合い、真実な言葉を口にするのではないというのです。

もう一つは、2節から4節において、自分の命は自分の外にあるという地点から出発する方向です。この方向は不思議に聞こえるかもしれませんが、キリストに結び合わされた人にとって、自分の命は自分の内で抱え込む所有物ではないというのです。「あなたがたの命は、キリストと共に神の内に隠されているのです」（3節）。この方向に進むとき、自分が生きることと、キリストに向かって生きる、キリストと共に生きることが重なってきます。その人は、「造り主の姿に倣う新しい人を身に着け、日々新たにされて」生きていきます（10節）。キリストに向かうことによって、自分自身の心が広げられ（12節）、

赦し合い（13節）、愛を身に着け（14節）、キリストの平和にあずかる（15節）ことへとつながっていきます。そこには、個人から社会や世界に向かうような命の広がりがあります。今は海外のニュースや情報に多く触れることができ、「グローバル」という言葉も日常に溶け込んでいます。ここにも、世界に関心を向け、実際に何かしらの活動に従事している学生の方もおられるかもしれません。しかし世界が身近に感じられるようになって、変わらず、むしろいっそう激しく、人同士、国同士、主義や思想による分断や対立が顕わになっています。それでも聖書はなお赦し、愛、平和を告げます。そして、そのしるしとして教会を指し示しています。教会は「真の知識」（10節）、すなわち、「キリストがすべてであり、すべてのもののうちにおられる」（11節）ことを知り、お互いをキリストの「体」（15節）として認め合い、共に生きることを見だしていく所なのです。

そして、このような「真の知識」（別訳では、「深い知識」）を大切に追い求める祈り、平和を求める祈りが同志社大学の歴史にもあり、今日においても受け継がれているのではないかと思います。先人の歩みを振り返りつつ、聖書が今の私たちの生き方に対しても豊かな力をもっていることを心に留め、また、それを実際に経験してゆく歩みでありますように、神の恵みと導きをお祈りいたします。

【参考文献】

山室軍平『私の青年時代』救世軍出版供給部 1935年（初版1929年）
山室軍平『平民の福音』救世軍出版供給部 1981年（初版1899年）
※これらを含め、山室の著作の多くはインターネット（国立国会図書館デジタルコレクション<http://dl.ndl.go.jp/>）で読むことができます。
同志社大学人文科学研究所編『山室軍平の研究』同朋舎出版 1991年

2017年5月31日 同志社スピリット・ウィーク春学期
今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録

初期の救世軍の路傍伝道の様子
初期の日本の救世軍（最前列左から2人目が山室）
救世軍の士官となった頃の山室（右端）と海外士官
山室の直筆メモ

※写真の表示はホームページでは省略します。